

# 幽玄

題字 高秀秀信

横浜能楽連盟  
会報 No.39  
平成22年3月31日

## 第二十五回能楽大会の成功と 今後の能楽連盟について



会長 新堀 豊彦

昨平成二十一年九月十九日に開催された横浜開港百五十周年記念第二十五回横浜五流能楽大会は皆様の御協力により、盛會かつ内容の充実したものとなりました。

やはり素人能であっても、能が入るといふことで会そのものが、これ程盛り上がるというの

が、当然のことと存じますが、梅若会の皆さんの御協力に対し、改めて重ねて御礼申し上げます。と思います。

い関心を持たれたのであります。これは連盟としても初めてのことであり、松沢知事も横浜能楽堂で能を初めて観られたということ、特筆すべきことであつたといえます。

これが神奈川県芸術文化振興施策の上に大きな影響を与えられることを期待いたします。思いですが、実は林文子新市長も、超多忙の中、その後、能楽堂を訪れ、山崎有一郎館長とか

なりの時間をとって懇談されたというところであり、知事、市長がともに能や古典芸術に理解を持たれることは、我々にとって力強さを覚え、新しい希望を抱かされたといえるでしょう。

今年(平成二十二年)は十一月に最大級の国際会議「APE C」が横浜のみならずみらい地区で開催することが決定しており、その準備で横浜市はてんでこ舞をしている状況ですが、財政状況が極めてきびしい中で、この会議に参加する各国の要人たちに是非「能」を見せたいという要望を、わが連盟として既に出しており、横浜能楽堂も、その方向で万全の準備体勢をとっているようです。

横浜における能楽五流の結末は六十有余年に及び、本年五十八回目を数える横浜能と共に、着実な実績と歴史をつくり上げて参りました。横浜文化賞、神奈川県文化賞を団体で授与されるという榮譽にも輝きました。

しかしながら、現在、各流共通した悩みは、謡曲仕舞の稽古人口の減少、老齡化現象でありまして、この状況は深刻であり、かつ重大な意味を持っております。私も二十五年余に及ぶ連盟会長として大きな責任を感じており、今や時流に合った新しい能・謡曲ファンの掘りおこし養成こそが喫緊の急務であり、それなくして今後の能 謡曲界の発展は考えられません。

りっぱな能楽堂を擁する横浜において、この砦を守り、攻勢に転ずることを我々自身の目標

### 連盟報告

企画事業担当 鈴木 力雄

とすべきでありましょう。そのために連盟も人心を一新し、初心にかえってがんばることを提起し、皆様の御支援、御協力をお願いいたします。

今期の活動は、第25回横浜五流能楽大会(9月19日)、第57回横浜能(11月7日)、第13回五流交流のつどい(2月13日)、それぞれ予定どおり実施いたしました。

特に横浜五流能楽大会は、横浜開港150周年記念大会であることから、堀内副会長の肝入りで、シテを同副会長の下で修業しておられるアイルランド系アメリカ人のパトリシア・マスイさんが素人能「吉野天人」を舞われることを記した案内状を、神奈川県知事、横浜市長にお送りいたしました。

残念ながら、7月28日辞意表明された、中田市長のご臨席は頂けませんでしたが、松沢県知事は最後まで観能されるなど、盛會裏に行なえました。

他方、同大会参加の会員の方の靴が取り違えられるトラブルがありました。残された最後の靴はご本人のものでなく、その後なんらの届け出もなく、取らずじまいとなったことに、取

り替えられたご本人から強い苦情が寄せられました。幹事としては、最善を尽くすべく、各流派あてに情報提供などの協力を求め、理事会の場に問題として提起されました。その結果、貴重品も含め、この種、事故は、基本的に自己責任のもと、個人できちんと管理すべきものとし、皆様の十分なご理解を頂くため、引き続きその都度実施要領などで注意換することとしましたのでトラブル防止のため、改めてお願い申し上げます。

また、車でおいでなされる方の人数を、予め、まとめるよう、能楽堂から要請されましたが、各流派とも把握は困難との理由で連盟として、次の取り決めにいたしましたので、ご理解くださるようお願いいたします。

一、能楽堂駐車場は原則として利用しないこと  
二、音楽堂駐車場など有料駐車場を利用すること

### 「第13回五流交流のつどい」を終えて

観世流 三谷 光子  
梅若会

平成22年2月13日、横浜能楽連盟主催「第13回・五流交流のつどい」が実施されました。

立春も過ぎ、暖かさの春を待たばかりでしたが、当日は朝か



それでも本番を迎える頃には、「多少のズレは天人の個性だよね」と、これまた絶妙な解釈で許されるまでになった。

本番は、実はちよつと切ない思い出になっていく。その頃には道順や型は完璧だったし、足運びや構え方まで気を配れるようになっていた。しかし、面と装束を着けると全然ダメだった。シユンと装束に吸い込まれ、なんとというかパワーが出せないのだ。これは初めて着けたときから感じていて、「もしかしたら本番では」と淡い期待を抱いていたのだが、やはり本番でも同じだった。輝くような装束の中で、わたしは、ただジタバタしていた。

あれから4ヶ月、わたしはお稽古を続けている。堀内先生や少し年の離れた先輩方と切磋琢磨した日々は、いい思い出だ。またいつか、もつとパワーアップしてお能を演りたい。そしてその時はまた大勢でやる曲を演りたいと思う。

## わがこころの世阿弥

宝生流 中野 義人

随分以前から世阿弥という人物を不思議に思っておりまして。六〇〇数10年の昔、当時の猿楽芸人は学問からは遠かった筈で

す。ほとんどが文盲だったのではないでしょうか。その中で世阿弥が今日に耐える幾つもの能楽の書を残したということは、ほとんど奇跡に思えます。

我が謡曲の拙さを疾うに自覚している愚生の関心は、いつの間にか謡の稽古より人間世阿弥に向かつておりました。

世は室町初期、尊氏・義詮二代を経て、ようやく安定してきた足利三代將軍義満の時代です。義満は強大な守護大名たちのパランスを読みながら権力を掌握し、公家・武門・仏教界いずれにおいても頂点に立ちました。京の北西、北山殿金閣は、南北朝合一を果した義満の勝利のモニュメントと言えます。

その義満と鬼夜叉(後の世阿弥)の繋がりは資料が少ないだけに却って想像を逞しくさせます。当時の時代背景を考えれば、猿楽を切り口にした物語は壮大な歴史ドラマになるに違いありません。それなのに今日、能楽界の置かれた状況の何と困難の多いことか。とてもドラマどころではありません。聞こえてくるのは高齢化とか、あくせくした世の風潮とか、愚痴ばかりです。能楽の将来を明るくする手立ては無いものか、これは同好の士の等しく頭を離れない今日の課題であろうと思えます。

非才の愚生としましては大層なことは手に負えませんが、兎に角、能楽の源流に遡り、観阿弥・世阿弥・義満を三つ巴にした物語を書いてみることにしました。果してそれが読み物になるか否か自身で確かめたかったです。先年「鬼神残影」と題した本を出版いたしました。

その一方で、少しでも観賞眼を養おうと、平家物語をはじめ、古典を繰返し読むように心掛けております。それは、世阿弥が風姿花伝の中で「しかればよき能と申すは本説正しく云々」と言っているあたりの消息に通じるのではないかと考えているからであります。時代背景や物語の前後の事情を承知して見所に座りますと、時空を超えた世界に僅かながらも近づけるような気がいたします。思いが昂じて昨年「耳なし芳一が語る平家物語」を出版いたしました。

著作といい能楽とのお付き合いといい、偏に不思議なる人物世阿弥との出会いによるものと、ご縁を有難く思っております。

(拙著は何れも書店取り寄せにてお求め頂けます)

## 謡ありてまた余禄も楽し

金剛流 草場 正春

鋼の粉塵が舞い、槌打つ金属音が鼓膜を裂く。ヤードで一瞬

時間が止まった様な昼休みの静寂のうちに「それは西塔の傍に住まひする武蔵坊弁慶にて候」の声音を聞く。青年の日の出来事が謡ごとにつれて思い出されます。

後年謡曲の末席を汚す事になった遠因は、謡曲「橋弁慶」の声音が耳朶に記憶されていたからではないかと思えます。それから30年有余朋輩に誘われて金剛流の謡曲を唇にしました。手始めに「狸々」を教わりました。それこそ下手なお経と言われる発声であります。「これは唐土かね金山の麓に、高風と申す民にて候」を唇にしてから細々と時日を累ね、20年有余よくも続けたものです。謡ったあとのお酒に引かれてたのか、今だに謡う度ごとに反省にならない反省しきりであります。

古い話で先の大戦の頃、飛行機の爆音を聞き分けるなどとハホト・ハヘイの和音を聞き分ける訓練をピアノで教わりました。何が何だかさっぱり分かりませんが、余禄も楽しは私事で能舞台の演能の絵を描くことです。描くことは下手の横好きで長年の習性になっております。

「いや雨にてはなかりけり、あれ御覽ぜよ雲の端の」平家の公達と琵琶青山の縁の音色。「経正」の演能のスケッチで紙面を飾らせて頂きます。

音痴で「丙」の評価の私が、それでも大丈夫と誘われて謡いを始めたのが50歳を過ぎてから

です。年は兎も角も後程、とんでもない履き違いに気付かされますが後の祭りです。

謡曲の拍節の和音に類するリズム・旋律はととても音痴の者が習得するには歯が立ちません。囃子のリズムはどうなっているのかさっぱりで、今だ理解の範囲にありません。

素謡で発声しているにはさまになっていいるのではと、自己評価している現在です。厚顔にもこれまで謡いを続けてこられたのは一重に友誼の厚さです。更には良き師にめぐり会えたことに感謝しております。謡いありてまた余禄も楽し。



「経正」のスケッチ

謡いを始めたきつかけには弁慶にて候とか、音痴でも大丈夫とかありましたが、声を出すのは健康によろしいかと思いはじめました。余禄も楽しは私事で能舞台の演能の絵を描くことです。描くことは下手の横好きで長年の習性になっております。「いや雨にてはなかりけり、あれ御覽ぜよ雲の端の」平家の公達と琵琶青山の縁の音色。「経正」の演能のスケッチで紙面を飾らせて頂きます。

# 聖地巡礼

金春流 山地 廣尚

私は妻の7回忌の供養に古寺の巡礼を思い立ちました。5年前のことです。

知人に相談したところ、旅行会社のツアーがあることを知り三十三札所を巡拝することにしました。

西国札所は観世音菩薩の参拜で、各寺院とも宗派は異なります。西国三十三札所は1200余年前に大和長谷寺の徳道上人により創設され、988年花山法皇の手で中興されたと伝えられ、2府5県にわたる最も歴史の古い観音霊場です。

京都清水寺、奈良興福寺をはじめ東は岐阜華嚴寺、西は兵庫圓教寺、南は和歌山青岸渡寺、北は京都宮津成相寺等、広範囲三十三ヶ寺を、1年間のうちに、7回2泊3日と1泊2日に分けて大阪空港からバスで出発巡礼します。

翌年は坂東三十三札所を巡拝しました。

坂東札所の三十三ヶ所が成立したのは、將軍源頼朝の観音信仰を契機に鎌倉武士により鎌倉時代初期ではなかったかと言われています。

現在1都6県に点在しており、

第一番札所は鎌倉杉本寺、次いで長谷寺、東京浅草寺、横浜弘明寺等があり、結願寺は千葉の那古寺です。巡拝はバスで月1回すべて日帰り、年7回、礼所が点在している為1回に三礼所しか参拝出来ない所もあります。

この年に秩父三十四札所を、2泊3日1回のバス旅行で巡拝しました。秩父市内と周辺数ヶ所の狭い範囲内とはいえ、高所に建っており、階段を登り、ケモノ道のような所を登り降りするので楽な巡拝ではありません。

成立は修験僧や篤信の武士、それに一般住民により長い年月を経てしぼり込んで行ったものと考えられています。坂東札所が成立して約200年後に成立したものと思われれます。

以上西国、坂東、秩父の各札所を合計して百ヶ寺、百観音、一般に日本百観音と言われています。

巡拝の終了したその年、長野善光寺で無事巡礼出来たことのお礼参りを行いました。

## 謡曲会員の増加を願う

喜多流 松田 憲二

私の田舎の高知では、その昔、城主 山内家が喜多流であったためか、喜多流が主流である。

私が子供の頃、結婚披露宴や

酒席では、謡がよく謡われた。私には10歳以上、年上の兄と姉が居り、兄は社会人となつて、間もなく喜多流の先生について謡を習い、姉の結婚披露宴などで謡っていた。

我流で謡っていた父との差は歴然としていた。そしてその時披露宴などでの上手な謡曲は格別のものだと思ひに、とどめたものであった。

時は流れ、私も社会人となり次いで「ロータリークラブ(以下RC)にも入会した。

そのRCに、能楽に造詣の深い会員が在籍しており、昭和48・49年頃、謡曲の同好会を募つた。その当時、私は小規模企業の役員の末席の職に在り、今後、従業員との結婚式等に招かれる機会も多くなることが予想され、そのとき、祝辞に代え、謡いとこの思いがあり、早速入会を申し入れた。

ところが同じRCの会員で同系企業の先輩のRCのMさん(故人)がこれを知り「君、謡いをやるならRCでなく、自分が入っているニッパツグループの会に入れ」と誘われ、それに従い入れていただいた。

その会にはニッパツの創業者・坂本さん(故人)を頭に10人位の方が居り、また、そのときの先生が幸運にも、能楽界の

至宝 友枝昭世先生であり、爾来、30有余年ご指導いただいた。

一方、肝心の謡の方は、今一つ進歩がなく反省ばかりである。その原因は、勿論、自分のセンスの無さであるが、それに加え、会社勤めの現役時代の不熱心さによる出席率の低さにある。

さて私も徒らに馬鹿を重ね、残された歳月もあまり多くはない。ならばせめてこれからの短い期間を精々努力して、悔いのない謡曲人生を送ることが、熱心にご指導いただいてくださる先生に伝えることだと思つている。

最後に一つだけ危惧すること、私は、私の所属する浜友会(9人)も、ここ数年間、新規参入者もなく、平均年齢も年々増すばかりである。

これは、謡曲人口全般についても言えることではないか。この格調高き我が国、固有の古典芸能である能楽に係わる謡曲人口を多くしたいと願うのは私だけではないと思う。会員各位が謡曲への新規参入に関して努力することが重要である。

なお愚案として、結婚披露宴などの会場となるホテル、その他の会場と提携して披露宴やその他の催しに能楽師の方の謡曲を一枚加え謡曲普及の一助とするのは如何なものだろうか。

## 能楽堂だより

二十二年五月以降の公演

横浜能楽堂では、次のとおり公演を開催いたします。

このほか毎月、第二日曜日に「普及公演―横浜狂言堂―」を開催いたします。

### 第五十八回 横浜能

六月五日(土)午後二時開演

狂言「花子」(大蔵流) 山本則俊

能「弱法師」(宝生流) 大坪喜美雄

S席四千元、A席三千五百円、B席三千元

チケット発売日

電話・Web 四月十日(土)正午から

窓口 四月十一日(日)正午から

特別普及公演「夏休み夢舞台」

七月二十六日(月)午後二時開演

狂言「二人袴」(大蔵流) 山本東次郎

能「羽衣和合之舞」(観世流) 片山幽雪

(九郎右衛門改メ)

こども(高校生以下)対象

S席四千元、A席三千五百円、B席三千元

電話 六月十二日(土)正午から

窓口 六月十三日(日)正午から

一般(残券がある場合のみ)

S席八千元、A席七千元、B席六千元

電話・Web 七月十日(土)正午から

窓口 七月十一日(日)正午から

お問い合わせ・お申し込みは、

☎〇四五(二六三)三〇五五まで。